

強者の戦略

東大日本史のみかた 37〔問題編〕

こんにちは、日本史の岡上です。今年度も東大の最新の問題の解説と、その問題の根底にある「東大が受験生に問いたい（知っておいてもらいたい）日本史」について考えていきたいと思います。

さて、第 37 回となる今回は 2019 年の東大日本史の第 1 問を取り上げてお話をしていきたいと思います。さあ、しっかり問題を考えてみてください。

【2019 年度 東京大学 文科前期 第 1 問】

10 世紀から 11 世紀前半の貴族社会に関する次の(1)～(5)の文章を読んで、下記の設問 A・B に答えなさい。

- (1) 9 世紀後半以降、朝廷で行われる神事・仏事や政務が「年中行事」として整えられた。それが繰り返されるにともない、あらゆる政務や儀式について、執り行う手順や作法に関する先例が蓄積されていき、それは細かな動作にまで及んだ。
- (2) そうした朝廷の諸行事は、「上卿」と呼ばれる責任者の主導で執り行われた。「上卿」をつとめることができるのは大臣・大納言などであり、また地位によって担当できる行事が異なっていた。
- (3) 藤原 顕光 は名門に生まれ、左大臣にまで上ったため、重要行事の「上卿」をつとめたが、手順や作法を誤ることが多かった。他の貴族たちはそれを「前例に 違 う」などと評し、顕光を「至愚(たいへん愚か)」と嘲笑した。
- (4) 右大臣藤原 実資 は、祖父左大臣藤原 実頼 の日記を受け継ぎ、また自らも長年日記を記していたので、様々な儀式や政務の先例に通じていた。実資は、重要行事の「上卿」をしばしば任されるなど朝廷で重んじられ、後世、「賢人右府(右大臣)」と称された。
- (5) 藤原道長の祖父である右大臣藤原 師 輔 は、子孫に対して、朝起きたら前日のことを日記につけること、重要な朝廷の行事と天皇や父親に関することは、後々の参考のため、特に記録しておくことを遺訓した。

設 問

A この時代の上級貴族にはどのような能力が求められたか。1 行以内で述べなさい。

B この時期には、『御堂関白記』(藤原道長)や『小右記』(藤原実資)のような貴族の日記が多く書かれるようになった。日記が書かれた目的を 4 行以内で述べなさい。

強者の戦略